



磯部草丘 『利根川』
紙本墨画淡彩・額装
(49・0センチ×56・4センチ)
勢いよく流れる利根川が軽快な筆さばきで描かれ、その遠景にはうつつらと雪がかかった榛名山と真っ白な谷川連峰が配されています。色彩を抑えた表現からは、俳人でもあった作者の磯部草丘（本名・寛太。明治30年―昭和42年）の世界観が伝わります。

未来への贈りもの 本市収蔵作品

磯部さんは、旧佐波郡宮郷村（現・伊勢崎市）の裕福な農家に生まれ、学業やスポーツ、美術に秀でた少年時代を送りました。前橋中へ進学し、同学年に彫刻家の森村西三と画家の横堀角次郎がいました。
一時、軍人や小学校代用教員を務め、長兄が亡くなり農家を継ぐ立場になりましたが、画家になることを強く決意し、上京しました。
大正8年、叔父であり東京帝国大学教授で美学者の大塚保治から、日本画家の川合玉堂を紹介されて入門。間もなくして雅号を草丘と名乗るようになりました。
5年の修行時代を経て、帝展（帝国美術院展覧会）に初入選します。昭和2年には、児玉希望ら玉堂門下と戊辰会を結成し日本画壇において注目を浴びました。戦前の群馬美術協会や戦後の群馬県展でも中心的な役割を担いました。
上毛三山や利根川などの地元の心象風景は、絵画だけでなく俳句にも登場し、草丘の主要なテーマとなりました。

問い合わせは 文化国際課 ☎8868-5825

優れた詩や詩評論に贈られる小野十三郎賞（大阪文学学校主催）に、詩集「真心を差し出されてその包装を開いてゆく処」（青土社）が選ばれた。
「この詩集は、私が9年ぶりに手掛けた4つ目のもの。受賞は思いがけないもので、とてもうれしいです」
ことしは、全国から119冊の詩集と8冊の詩評論書が選考の対象に。これまでの経験をもとにしつつ、新しいリアリズムを感じさせる独自の方法が評価された。また、詩人・小野十三郎さんの考え方を新たに継承する作風とも評された。
「詩を作るときは、読者に意外な発見をしてもらえるよう心掛けています。平凡な地点から変化していき、新しい発見ができる小旅行をしているような気分を

味わってもらいたいです」
詩を始めたのは大学生のとき。ふと頭の中に詩が浮かんだことがきっかけに。「詩は私の大切な表現方法です。これまで言葉をパズルのように組み替えるなどの試みもいろいろとしてきました。この詩集もその試みの一つです」
名古屋出身。2年半前、転勤で本市へ。休日は利根川沿いを夫婦で散歩したり、買い物をしたりして過ごしている。
「萩原朔太郎のふるさとに住むことができて、同じ詩人として幸せです。今後は人肌の温もりがあるような、誰にでも分かる詩を書いていきたいと思っています」
丁寧に語ってくれた表情からは言葉に対する思いが伝わってきた。これからの作品にも、ぜひ、注目していきたい。



小野十三郎賞を受賞

宋 敏鎬さん 48歳
石倉町

誰も見たことのない詩を目指して



自転車で駆け上がる赤城山

まえばし赤城山ヒルクライム大会を9月30日に開催しました。全国から集まった約3,000人が、標高差1,313級の難関コースを自転車で疾走。選手たちは、沿道からの声援を力に赤城山の頂を目指しました。



街並みと音楽の調和を楽しむ

9月23日、中心市街地で風のまち音楽祭を開催。ジャズやクラシック、ロック、フォークなど多彩なジャンル105組のアーティストが参加しました。前橋テルサで行った「風のまちスペシャル」では、ゲスト5人が名演奏を披露し満員の観客を沸かせました。



伝統芸能を未来へつなぐ

9月30日、市民文化会館でこども芸能座を開催しました。夏休み中に「ふれあい体験事業」などで日本の伝統芸能に触れた子どもたちが、民謡や剣詩舞、八木節などを披露。堂々と発表する大人顔負けの姿に、会場からは大きな拍手が送られました。